

田和山遺跡の国指定史跡 10 周年を寿ぐ

会長 田中義昭

田和山遺跡の国指定史跡が決まって 10 周年になりました。思えば、破壊寸前、明日にも工事用重機が唸りを上げて「おやま」に襲いかかる、そんな状態でした。しかし、田和山の不思議な魅力が大勢の市民の心をとらえました。そして「お山を楽しむ」部隊が続々と現れて、窮地に立つ遺跡を破壊から護り抜き、国指定遺跡に持ち込んだのでした。

こんな逆転劇が演じられた遺跡は全国的にもあまり例はありません。まったくの快挙でしたし、その後に「田和山に続け」の声があちこちで出るようになったのも頷けます。10 周年を迎え、あらためて田和山遺跡保存運動の成果のすばらしさを思い返します。この時に当たり、今一度成功の鍵がなんであったかを問い直してみました。

私が遺跡の保存運動に直接・間接に関わってから半世紀が過ぎました。ほとんどの場合、頑張った甲斐もなく遺跡は無くなりましたし、保存できたとしても半分とか三分の一とかの部

分保存に終わったのです。横浜市の弥生時代環濠集落大塚遺跡も相当活発な運動を展開しましたが、集落の三分の一が保存されただけでした。環濠遺跡として知られる弥生遺跡はかなりありますが、壕が集落をを完全に取り囲んだ状態で発見されたのは大塚遺跡がほとんど唯一ではないかと思います。それでも部分保存に終わったのです。ですから、田和山遺跡の保存がなぜ実現したのか、その訳をはっきりさせておくことは、これからの文化財問題を考えるうえで大いに意味のあることだと考えます。

「成功の鍵」、それは一言でいって「おやまを楽しむ」ということではないでしょうか。「おやま」に登って辺りを見晴らす。「心が洗われる」といいましたが、登頂した人々を捉えたのは広く優しい自然の中に立つ安堵感や「へ～！」としか表現できない感慨ではなかったかと想像します。この丘に「カミ」を招き、豊穡と暮らしの安寧を祈願した弥生人の思いもこんな具合ではなかったかと。

「遺跡は残しても活用しないと意味がない」と言われ続けています。田和山遺跡の場合、活用の仕事も「おやまを楽しむ」

部隊が中心になって引き受けました。「田和山サポートクラブ」です。この 10 年間、多くの市民を誘い、復元建物の管理、学習会開催と奮闘してきました。弥生人の苦勞や喜びを体験するために米作りもやりました。皆、こんなことをしたら弥生人に近づけるかの想いで夢中になって取り組みました。

遺跡の保存の仕方では一番いいのは「自然保存」です。地下に埋まったままにして手を加えないことです。田和山も約二千数百年間「自然保存」されていましたが、病院建設のために発掘されたのです。残念なことは、頂上の建物跡、三重の壕、多くの建物群とそこに保存されていた土器や石器が掘り出されて別の場所に入れられてしまいました。発掘調査をするとういう形になるのは止むを得ません。しかし、立派な調査報告書が刊行されて出土遺物は一応お役御免になっています。この遺跡を遺跡のすぐ近くに置いて「これはあの壕から出たのですよ」と説明すれば、見学者の心をより強く引き付けることができるに違いありません。「自然保存」に近づけることにもなるのです。だから出土品の展示場が欲しい。お手洗いももう少しマシなものを。南側の「おやま」をきれいに、元気にしてい

る「里山を育てる会」の会員さんともゆっくり談笑する処があったらいい。「サポートクラブ」会員の切実な願いです。見学者の要望です。10周年に当たり、何としてもガイダンス設備建設を求めたい。そのことが一番の願いです。よろしくお願いします。(田和山遺跡国史跡指定10周年記念誌、平成23年10月)